

心身は食で成る

レイベー新聞

第90号

平成30年新年号
名古屋市瑞穂区高田町4-15
有限会社レイベー
☎052-852-3144

高齢者の訪問介護は崖っぷち

昨年は介護報酬が7割に削減された新サービスが本格始動し、介護認定が低く抑えられるなどして、特に在宅での介護は崖っぷちといった状態だ。新サービスの報酬は、サービス時間をそれまでの1時間から45分に削減して給与も15分削減して支払えば、問題ないという事だろうが、ヘルパーの交通費や行き帰りに使う拘束時間の時給を考に入れるなら難しいと判断せざるを得ない。反対に言えば、住宅系専門の訪問介護なら同じ在宅でのサービスなので交通費やその拘束時間も必要ないから、住宅系なら可能かもしれない。

政府は、国民総活躍とか介護休業（退職）を全廃するなどといって高齢者向け住宅等の住宅系に力を入れている。政府は高齢者を自宅に置いておけば、そのうち家族に迷惑をかけることになるから高齢者には施設ではない住宅系に引っ越してもらい、働ける人間は働いてくれと言うことだ。

住宅系には様々なものがあるが、私はグループホームまで施設にはカウントしない住宅系になるのには驚いた。世界的には高齢者や障害者を施設には入れないで一般社会で生活してもらおうのがよいとされているので、施設にはカウントしない受託系を増設することで誤魔化す。

これは日本政府のマジックなのだろうか。

しかし政府が、そこまで頑張っても介護殺人は後を絶たない。年末に聞いたNHKラジオでは愛知県の介護殺人に詳しい専門家が話をしていたが、介護殺人に至ってしまった原因の中に住宅系に入れようと思っても支払いが出来ないことが大きいという。

収入が少なくても、生活保護が取れば問題はない。生活保護がとれば問題の指摘はあるものの無認可住宅も含めた住宅系なら即入居可能になる。しかし、財政削減で生活保護決定が難しくなっている。

住宅系が増えているので本来の居宅を訪問する介護事業所は激減している。住宅系にはその住宅専門の訪問介護事業所がついていて、その訪問介護事業所も訪問介護事業所とカウントするので、それを含めた事業所総数は減っていないが、本来の訪問介護は激減している。残っている事業所でも高齢者の仕事はなくなり障害者サービスが主になっている。

住宅系での訪問介護の仕事は、制度は訪問介護であるのに、求められるのは施設介護であるから仕事は非合理的にならざるを得ない。それに、高齢者向け住宅等では入居者は全て独居とされるので、本来の居宅では同居家族があると利用できない生活援助も利用できる所以で限度額いっぱいまで利用することになることが多い。私はこのあたりを問題にしないで介護保険制度の赤字を語る事に疑問をもっている。

一方介護保険制度発足から17年、訪問介護事業には必要な介護技術や知識の他、訪問介護で必要とされる家族や地域との連携が蓄積され、訪問介護の力量は地域社会を含め素晴らしいものになっているはずだった。

しかし日本政府のマジックと報酬削減等のためにそれはない。

実際には今の訪問介護業界には、経験豊富な人材がほとんど残っていないのが現状だ。

だからして仮に政府が考え方を改めて訪問介護の介護報酬を上げたとしても、訪問介護から優秀な人材が去ってしまっているので、訪問介護の真の復活は難しいと思っている。



セーフティーネットとしての配食

子供の6人に1人が貧困と言われるほど格差は深刻になり、子供食堂が話題となる近年である。さて、当社は介護事業だけでは経営が成り立たないので数年かかって介護事業から配食事業に重点を移してきた。介護の原則は食事・清潔・排泄だから、原点に帰ったとも言える。しかし、介護事業全体に言えることだが、食事について当たり前と考えすぎで軽んじているように思う。

買い物と調理には時間がかかるから削減するのは仕方がないとしても、だったらそれに代わるバランスの良い食事の提供手段を提供しなければならないが、それが無い。結局コンビニ弁当やおにぎり、カップ麺の比重を増やす結果になる。

高齢者は、若い時に比べれば食事量も必要なカロリーも少なくなる。だから、コンビニ弁当やおにぎり、カップ麺、時には饅頭一個で満腹のように感じてしまうのも事実である。それでは、体力は低下し病気がちになり、介護が必要な状態にしている様なものだ。

それに、家族が居る場合も高齢者の時間に合わせて食事を用意したり、柔らかく調理したり、ましてや独居の場合は一人分の食事を用意するのは時間的にも経済的にも効率的とは言えない。

そのようなこともあってか、新規で配食の依頼があっても、すでにまともには食べることが出来なくなっている場合が少なくない。もう少し前に依頼してくれれば、ここまで体力も落ちていないだろうと思うのだが、結果論に過ぎない。それでも何とかしようと刻んだり、トロミを付けして対処しているが難しいのが現実だ。どうであっても、ことは食事である。配食はごく少ない補助金で可能なセーフティーネットになった。



憧れのアメリカ

白黒テレビが普及し始めた頃アメリカの番組をよく放映していて、私たちは番組に出てくるアメリカの生活に憧れた。その頃のアメリカは、軍事面だけでなく文化面でも世界をリードしていたのだ。広い家、大きな冷蔵庫、車に芝生、豊富な食料と核家族を目標に日本は突き進んでいった。

木造アパートに住み、高度経済成長を果たし、テレビ冷蔵庫クーラーを手に入れ、自家用車を手に入れた。

労働力確保の面でも必要とされたので核家族化は急速に進行し、大家族は一部のものとなった。

しかし強大なアメリカの文化をそのまま真似ることは不可能だったので、ミニチュアの擬似的アメリカを手に入れることになった。一瞬は自らが中流であると錯覚したのもこの頃だ。

しかし、アメリカがベトナム戦争に負けた頃から、世界をリードしてきたアメリカの様子がおかしくなってきた。アメリカが発信する映画や映像の文化面でも、幸せなアメリカンファミリーはどこかに行ってしまった。日本のテレビドラマはアメリカのテレビドラマを焼き直ししたものが多かったので、家族モノから刑事モノ・検死モノへとドラマのテーマは移っていった。

人情刑事ものまでは舞台を日本にすればよかったが、リアルな刑事モノや救急病院モノ・大統領モノになると無理が出てきた。アメリカにはキリスト教の精神があるし、日本には銃規制がある。日本には大統領がないので代わりに総理大臣を当てても、現実が違いすぎて長続きするストーリーが組めないのだ。

文化面に限らず、アメリカの政策を日本にそのまま持ち込んでも手本通りには行かない。

日本の介護行政はアメリカだけを手本にしてきたわけではないだろうが、世界をリードしてきたアメリカの影響は計り知れない。仮に日本が手本通りにいったとしてもアメリカを見てみるがいい、格差は広がり差別や矛盾は拡大している。だから何がよいのか悪いのか区別が立たず物事が入り混じっている状態＝混沌とした状態と言えるだろう。

こんな時だからこそ、私は原点に帰って食事を作ることにした。食べていれば食べられることが出来れば、人間は生きてゆける。生きてこそ未来がある。